

## テーマセッション5

## 成人がん患者と家族への外来看護

浅野 美知恵 (順天堂大学医療看護学部)

大石 ふみ子 (三重大学医学部看護学科)

森山 美知子 (広島大学大学院保健学研究科)

## 【はじめに】

近年の統計調査でがん罹患率が40歳代から急激に増加することが示され、働き盛りの成人とその家族にとってがんが重大な健康問題となってきた。また、めざましいがん治療技術の進歩、組織的な早期発見態勢、標準治療の普及などにより、がんの5年生存率の増加、がんサバイバーの増加をもたらしている。がんは、その再発・転移という疾病の特殊性から治療経過および観察経過が長期にわたるため慢性疾患と捉えられ、さらに、がん医療は、病院での在院日数の短縮化に伴い、多くの部分が外来に移行して実施されていることから、がん患者と家族のQOLは、重要性の高い課題となっている。したがって、今日の我が国において、診療も療養上の世話においても外来の果たす役割は多大である。

そこで今回、成人がん患者と家族への様々な形の外来看護の取り組みを取り上げ、我が国特有の歴史と文化的背景をもつ外来という場での看護活動について、フロアを巻き込んで情報交換と意見交換を行いたいと考える。

## 【素材の提示】

## 1. 消化器がん術後の成人患者と家族員への外来看護

人間の基本的欲求に関わる消化器がんは、生活習慣など生活全般に長期に亘る影響を及ぼすため、術後の社会復帰過程を、患者と家族員の両者の健康生活に着目して看護することは意義深い、という考えに基づいて実施された介入研究を取り上げる。社会復帰過程での両者の生き方や相互関係に、看護はどのように関わるかについて事例を用いて紹介する。

## 2. 乳がん患者と配偶者への外来看護

女性のセクシャリティに関わる乳がんは、妻、夫という個人、そして夫婦関係に影響を及ぼすものであるため、外来での乳がんの診断時期から入院・手術をへて退院後の追加治療に至る一連のプロセスを、夫婦一単位として看護することは意義深い、という考えに基づいて実施された介入研究を取り上げる。乳がんの診断や治療によってそれぞれに困難を体験する患者とその配偶者である夫が、どのように見つめ合い、働き掛け合って協働にいたるのか、そこに看護はどのように関わるかについて事例を用いて紹介する。

## 3. 外来におけるディジーズ・マネジメント

ディジーズ・マネジメントとは、慢性に経過する疾患に対して、医療者側には診療ガイドラインの順守とデータ管理・フィードバック、患者・家族側に対しては主体的に症状をコントロールし、治療が継続できるよう教育を中心とする支援を行うものである。継続に関するリスクが高い場合にはケースマネジメントも実施する。また、日常生活・役割や人間関係が変化することから生じる苦悩に対しても家族を含めたアプローチが必要となる。これらより、新たな慢性疾患ケアモデルを紹介する。

## 【討論したいこと】

今日、外来に求められている役割が増大しているにもかかわらず、マンパワーにおいても、物理的環境においてもあまりにも不足という現状がある。その中でどうすれば患者と家族に質の高い看護を提供できるのか。また、導入が推進されている“外来化学療法”、“在宅看護サービス”等における患者と家族への看護、病院と地域の連携など、より充実した外来看護の取り組みでの課題について討論したいと考える。